

道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財調査

山内遺跡



.....年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9分の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら計画していますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によつて必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても、道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに本年度から発掘調査を行うことになりました。

本報告書は、平成元年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成2年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 菅原信二

島根県教育委員会では、平成元年度、建設省中国地方建設局の委託を受けて、一般国道9分(安来道路)建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施いたしました。

本年度は宮内遺跡をはじめ4カ所の遺跡を調査しましたが、宮内遺跡から弥生～古墳時代の豊穴住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡が検出されました。また、トレンチ調査の結果、他の遺跡からも住居跡、横穴墓、古墳など、貴重な遺構の存在が明らかになりました。今回の調査成果を検討すると、安来平野を望む低丘陵地帯には、かなりの密度で遺跡が存在しており、今後さらに詳細な調査が必要であると考えています。

なお、本書が安来市の歴史を解明する手がかりとなり、また、多少なりとも文化財に対する理解と关心を高めることに役立ちましたら幸いです。

最後になりましたが、調査に当たり御協力いただきました関係者各位に、厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

島根県教育委員会

教育長 原田俊夫

例　　言

1. 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成元年度に実施した、一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査概報であり、平成2年度調査の結果と合わせて、本報告書を作成する予定です。
2. 本年度は、宮内遺跡(安来市宮内町字屋並3の3外)のほか大原遺跡(安来市佐久保町字大原739外)、白コクリ遺跡(安来市佐久保町白コクリ769外)、島田南遺跡(安来市島田町字雨谷9の1外)の各遺跡の調査を実施しました。
3. 調査組織
事務局 泉 恒雄(文化課長)、井原 譲(同課長補佐)、勝部 昭(同)、野村純一(文化係長)、吾郷朋之(文化係主事)、加田恵廉(島根県教育文化財団嘱託)
調査員 川原和人(文化課埋蔵文化財第二係長)、石原 順(教諭兼主事)、丹羽野裕(同主事)、原田昭一(同)、井上正志(教諭兼主事)、宮本正保(同臨時職員)
調査指導者 山本 清(島根県文化財保護審議会委員)、田中義昭(島根大学法文学部教授)
三辻利一(奈良教育大学教育学部教授)
4. 本書に掲載した「遺跡位置図」は、建設省国土地理院発行のものを使用しています。
なお、本文中に掲載したイラスト等には、その都度引用文献を明記しました。
5. 本遺跡出土遺物及び写真は、島根県教育委員会で保管しています。

6. 調査参加者・協力者

島根県立安来高等学校	安来市	安来市教育委員会	伯太町教育委員会
広瀬町教育委員会	社日公民館	宇賀莊公民館	島田公民館
青戸 弘義	飯塚 淑子	池田 朗	井塚 喜一
岩崎 和女	岩崎 茂子	岩崎 静代	岩崎 末子
岩田 義道	大江 松代	大槻 喜能	小山 燕
川合 章	喜多川悦子	木戸 昭雄	木村 善子
近藤 春野	宍重 静子	清水 邦夫	清水美緒子
田川 佐二	田辺 貞子	角森 静枝	飛田 光代
仲西 晋	仲西山美子	中西 容子	永見シゲヨ
長谷川弘子	長谷川一彦	飯橋アヤ子	深田 浩
細田 已春	本藤 敏子	牧野 紋江	三雀 好江
山辺みどり	吉野 賢		
			(敬称略)

調査の経過

本年度は、平成元年7月4日から11月22日までの間、宮内遺跡で63カ所、大原遺跡で16カ所、臼コクリ遺跡で29カ所、さらに島田南遺跡で12カ所のトレンチ(長方形の溝)を掘り、遺跡の性格・範囲・深さをつかむ調査を行いました。この調査では、表土や包含層(土器や石器などの遺物を含んだ土層)にある遺物の取り上げを中心に行いました。遺構(住居跡や墓など、昔の人々の生活の跡)が見つかった場合、そのトレンチはそれ以上調査せず、後で行う全面発掘調査で詳しく調べることにしました。ただし水田部分では、水がしみ出てトレンチの壁がくずれるため、危険のない範囲で調査を行いました。

このトレンチ調査の結果をもとにして、9月20日から12月22日までの間、宮内遺跡・第Ⅱ調査区の全面発掘調査を行いました。大部分が掘りにくい雑木林や竹林だったため、重機で表土を取りのぞいた後に、人力で掘り進めました。その結果、この調査区は、後世に畠の造成などで地形が大きく変えられており、遺跡がかなりこわされていることがわかりました。結局、表土や包含層からかなりの量の遺物が出てきたものの、遺構としては、堅穴住居跡2棟と掘立柱建物跡1棟を発見するにとどまりました。それぞれの遺構については、ていねいに調べた後、写真撮影をし、図面をとりました。また、残り具合の良い包含層では、土層ごとに遺物を取り上げた後、部分的に残しておいた土層の断面を写真撮影し、図面をとりました。最後に、調査区全体の地形測量を行い、12月22日、調査の全日程を終了しました。

凡例

- 古墳
- 横穴墓・土壙墓
- 住居跡
- ▲ 一里塚
- △ 城跡
- △ 宮跡・鉢跡



遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡周辺の地理と歴史

地理 安来市は、北に中海を望む、島根県の東端部に位置しています。市域の中央には、飯梨、伯太、吉田の三河川によって形成された安来平野が広がり、その東部から西南部にかけては低丘陵地になっています。市街地は、平野の東の端に発展しています。今回の発掘調査の契機となった国道9号(安来道路)は、この市街地の背後の丘陵地を東西に貫く形で計画されました。このため発掘調査は、この道路計画地に沿って実施していくことになりました。今回調査した宮内遺跡は、伯太川の沖積作用で形成された低地と東部の丘陵地が接する所に位置しています。

歴史 安来市周辺では、縄文時代(約10,000年~約2,300年前)以前の遺跡はあまり知られていません。しかしこのあたりの環境は、当時の人々にとって決して住みにくいものではなく、まだ知られていない遺跡が数多くあると考えられます。旧石器時代(約10,000年以前)や、縄文時代の初め頃は、今よりも水位が低かったと考えられ、当時の遺跡は現在の平野の下に埋もれている可能性もあります。弥生時代(約2,300年~1,700年前)になると米作りが始まり、安来でも各地で当時の遺跡が見つかっています。大塚町八幡谷遺跡、沢町潜戸山遺跡、黒井田町高広遺跡などでは、当時の住居の跡が見つかっています。これらは谷に面した丘陵の上や斜面に位置しており、おそらく谷を開墾して谷田を開き、米作りをしていたのでしょうか。

奈良時代(約1,300年前)に編纂された「出雲國風土記」によると、中海に張り出してそびえる十神山や、平野にばつと突き出した飯島は、当時島だったことがわかります。今は美しい出雲地帯が広がる安来平野も、弥生時代頃には今ほど広くはなく、また飯梨川や伯太川は大雨のたびに氾濫したため、沼地のような部分が多くあったと思われます。

さて弥生時代、平野や谷の縁辺に住んだ人々は、山の上に墓をつくりました。安来平野の周辺の山の上には、九重土壙墓、折坂町清水山土壙墓など多くの土壙墓群が知られています。弥生時代も終わり頃になると、大きな高まりを持つ墓がつくられるようになります。沢町の鍵尾土壙墓や西赤江町の仲仙寺墳墓群などで、この地域を統率する首長が現れてきたことをうかがわせます。

古墳時代(約1,700年~1,300年前)、この安来平野周辺では数多くの古墳が築かれました。初めの頃(約1,700年前)は、造山古墳群など、大きな古墳は平野の西側の荒島丘陵に築かれました。中期には安来の全域で大きな古墳が築かれました。黒井田町巣壳塚古墳、飯生町今若峰古墳、宮内町あんもち山古墳などがその例です。終わり頃になると、非常に多くの横穴墓がつくられました。出雲地方は横穴墓が多い地域ですが、安来は特に多いことで知られています。

奈良時代、日本は国の制度が整い、律令制がしかれ、安来は意宇郡の中にに入りました。また、大陸から仏教が伝わり、有力な豪族は寺院を造って自らの力を誇示しました。安来では、野方町に教吳寺が建てられました。

中世以降、安来は中海に面した港を持つ交通の要所として発展し、現在に至っています。

宮内遺跡に生活していた人々

■住居について

宮内遺跡の発掘調査では、人々の生活の跡として3棟の住居跡が見つかりました。

- 穴住居跡：弥生時代後期(約1,800年前)と古墳時代前期(約1,700年前)のもの
- 挖立柱建物跡：奈良時代(約1,300年前)のもの

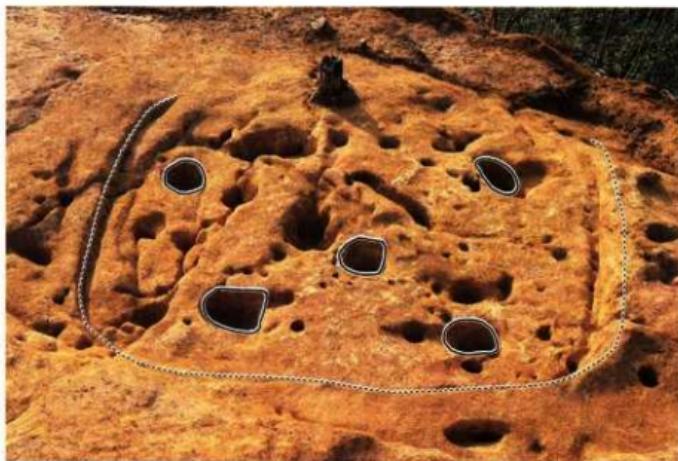
また、弥生時代～奈良時代の土器、石器、土錐、紡錘車等の生活道具が出土しています。その他、埴輪の破片も出土していますので、形や大きさ等詳しくはわかりませんが古墳もつくられていたようです。

今から千数百年前には、この宮内地域にわたしたちの祖先が住んでいたことが確かめられたのです。

穴住居は、地面を掘りこんで床面とし、そこに穴を掘り、柱を立て、周りに床面より高い土手を築き、屋根をふいた住居です。穴住居は、比較的簡単な技術で建てることができること、保温性に優れていることから古代において長い間作られてきた住居です。8ページの図は、当時の住居の建築想像図です。柱材として、クリ・クヌギ・スギ・ヒノキ等を用い、植物のつるで縛り、屋根は木の枝や、カヤ・枯れ草、わら等でおおったと考えられます。農作業が一段落した秋～春にかけて木材を伐採・採集して、20人で15日前後かかって作り上げたようです。

円形住居跡(約1,800年前)
※当時の想像図を
遺構の上に重ねたもの





隅丸方形住居跡(約1,700年前)
すみまるはうじゅきょく

一般に竪穴住居の移り変わりは、床面の形で考えますが、時代の推移とともに、

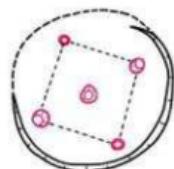
円形 → 多角形(五角、六角) → 隅丸方形 → 方形

と変化していきます。従って、床の形が丸い住居は円形住居、床の形が四角い住居は方形住居とよびます。今回は、その中で円形住居(標高4m)と四隅に丸みが残る隅丸方形住居(標高16m)の跡が見つかったのです。

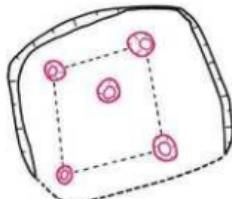
左図は、円形住居跡と隅丸方形住居跡の柱の跡を示したものです。……線で結んだ四つの穴は柱の跡で、中央の穴は炉の可能性が強いと考えられます。

円形住居跡は、柱間の長さ1.6m、直径4.5m、面積 16m^2 ぐらいで、10畳程度の広さだったでしょう。この住居には、土器類が残っておらず生活したあとがありました。おそらく新らしい住居に移る際、家財道具を持ち去ったのでしょう。または、物置として使っていたのかもしれません。

隅丸方形住居は円形住居から方形住居へ移る段階の住居で、4辺が直線的になってしまって四隅に丸みが残る形式の住居です。この住居跡の場合、4本の支柱間の長さはほぼ1.6m間隔で、面積 20m^2 、12畳ぐらいの広さです。どちらの住居も、一家族が住める程度の広さと言えます。



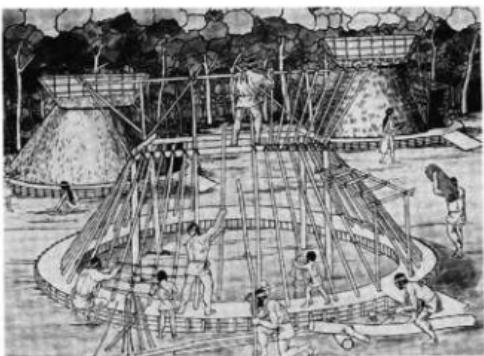
円形住居



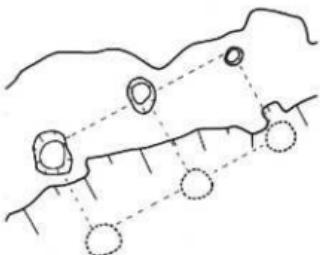
隅丸方形住居

住居は、豎穴住居が弥生時代～古墳時代にかけて主流でしたが、今から1,200年前頃より急に減り、それに伴い1,300年前頃より掘立柱建物が増え始めます。宮内遺跡もそれと同じような過程をたどったことが分かります。

掘立柱建物は、平地に穴を掘って柱を立て、壁で周りを取り囲んでいる建物です。床面の形は長方形で、床は土間のままか、むしろのようなものを敷いていたと考えられます。豎穴住居に比べて室内が広く使え、建て方も簡単だという利点があり、現代の家屋建築につながる住居だといえましょう。



豎穴住居建築想像図⁽¹⁾



掘立柱建物跡の柱穴跡



掘立柱建物の復元⁽²⁾

上図は、東側斜面で見つかった掘立柱建物跡の柱の跡を示したものです。柱穴の直径は40～50cmで、柱の間隔は1.5m程度です。上段の3穴は残っていますが、残り3穴(……線部分)は後の時代に削られておりわかりません。おそらく間口2間・奥行き1間程度の広さがあり、復元想像図のような建物だったと考えられます。

この遺跡は、後の時代に畑を作る等でかなり壊されているため、人々がどのように生活していたのか十分わからないのが大変残念です。今回の調査では、各時代1棟ずつしかなかった住居跡もその当時はもっとあったと考えられます。日本における米作りは弥生時代から始まったとされていますが、米作りは集団作業であるため、何軒かまとまって生活していたのは間違いありません。その集団は、親子・兄弟等の血のつながりを強く持った集まりであり、農作業をはじめ共同で生活していたと考えられます。

(1) 北九州市立考古博物館常設展示図録(1985年)より

(2) 岡山県古代吉備文化センター編「百間川の遺跡群—よみがえる原初・古代のムラ—(1989年)より

■くらしの道具

宮内遺跡からみつかった遺構は住居跡だけでしたが、当時の人々が使っていたと考えられる生活の道具類が出土しています。

写真は、縄文時代～弥生時代頃の石鎌です。宮内遺跡から3km東の島田南遺跡で出土したものですが、宮内でも同じ物が使われていたでしょう。石鎌は、狩りの道具で、矢の先に右図のような形に取りつけて使っていたと考えられています。

縄文時代は食料を得るために狩りや漁、木の実の採集を行っていた時代です。縄文時代には金属器はありませんでしたが、石や動物の骨、土、木等を使って、使い道に応じた多様な道具を発明し、使いこなしていた時代でした。

その中でも、特に大切な発明は土器でした。日本で土器を使い始めたのは約12,000年前だと言われています。

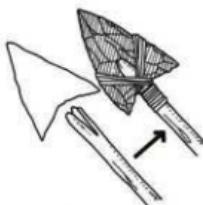
地球は何度も冷たくなったり暖かくなったりを繰り返してきましたが、縄文時代が始まる頃にはだんだん気候が温暖になり、ドングリやクリの実が豊富に実り始めました。食料として木の実が豊富に食べられるようになり、食生活に変化が生まれ、それとともに土器が広まっていったのではないでしょうか。

今回は縄文時代の土器は見つかりませんでしたが、土器の発明はそれまでの食生活を大きく変えるものでした。縄文時代は、イノシシやシカなどの肉、魚貝類、木の実、きのこなどを食べていました。

それらの食料が、土器の発明により簡単に煮炊きできるようになったのです。また、生ではすぐ腐ってしまう食料を長持ちさせたり、殺菌することにもなるので、飢えや病気も少なくなったと考えられます。このように、食生活の変化と土器



石鎌(島田南遺跡出土)



石鎌の使い方



弥生土器

(1) 戸沢充則編「縄文人は生きている」有斐閣(1985年)より

の使用は深く関わっていたのでしょう。

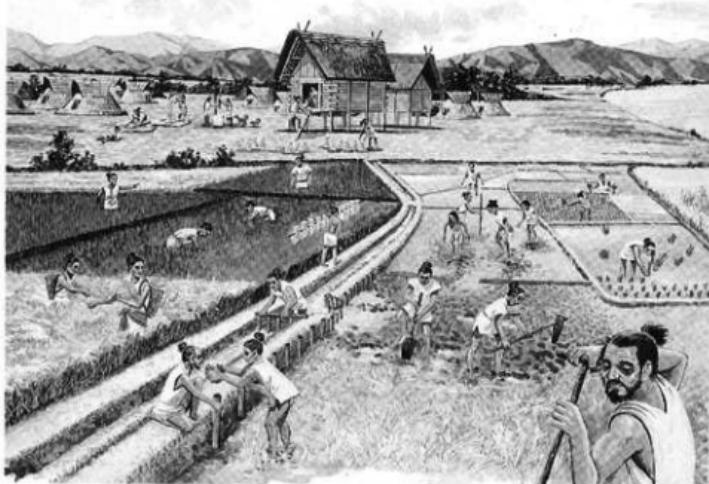
やがて、大陸から日本に米作りが伝わってきて、縄文時代から弥生時代(約2,300年～1,700年前)に移っていきました。

9ページの写真は、今年の調査地区から出土した弥生土器です。完全な形のものではありませんが、いずれもほぼ1,700年～1,900年前の土器だと考えています。

①は壺の口、②は壺の底部、③は臺^たといって壺等を載せるための台として使っていたものの下半分です。④は低脚壺といわれ、食物を盛りつけるため使われていたものです。弥生時代には、縄文時代に比べて、用途に応じた、使い勝手のよい土器が作られるようになってきました。そして、煮炊きするための甕^{かま}、食料を貯えておくための壺、食物を盛り付けるための高環^{たかわち}・鉢^{はち}・皿^{さら}と目的に応じて使い分けていたようです。

中国大陆→朝鮮半島→日本と伝えられた米作り(下想像図参照)は、日本人の生活を大きく変えました。食生活だけでなく、水田を作りやすい低地に定住をはじめ、やがてムラ→クニが生まれ、一つの国にまとまっていくという社会全体の変化をもたらしたのです。現在の日本人の生活の原形ができたのは弥生時代といっても差し支えないほどです。

宮内遺跡でも、竪穴住居跡や発見された弥生土器などから、弥生時代に稻作をして生活していた人々がいたことは間違いないようです。しかし水田の跡がないこと、住居跡が1棟しかないこと、住居跡から土器が出土していないこと等から、当時の生産や生活の様子はわかりません。伯太川の沖積作用が盛んだったため、当時の水田跡は現在の水田の地下に埋もれているのかもしれません。



弥生時代の米作りの想像図

■土器の始まり

縄文時代以前の石器時代には籠が使われており、土器作りは籠の模倣から始まったようです。世界各地の古い土器の中には、籠の形を模倣したものや実際に土器に籠の繊維が付いているものが見つかっており、籠が土器の原形であったことがうかがえます。

籠から土器が生まれるきっかけについてはいろいろな説があります。水を汲むために籠の内側に土をぬったという説、また、籠に食べ物を入れておくとネズミがかじって穴を開けてしまうので、その穴を粘土でふさいでいるうちに、初めから粘土をぬっておけばよいということになり、そのうち土で容器を作ろうとなったという説等です。

土器は焼かなくても水分さえなければ使うことができます。しかし、そういう土器は使い道が限られてしまいます。焼くことによって、土器は丈夫でかつ多様な使い道が生まれるので。それでは、土で作った器を焼けば堅くなることを昔の人はどうして発見したのでしょうか。それには、次のような説があります。

- ・たまたま焼いていない土器が炉に転がって焼けた
- ・土のついた籠を焼こうとして土も一緒に焼けた
- ・土器を入れていた食べ物を暖めて食べようとそのまま火にかけたため土器も一緒に焼けた

実際の土器作りは、次の手順で行っていたようです。

〈土器のつくり方〉

①粘土をよくこねる ②のばしてひも状にする ③粘土ひもを積み上げる ④形をととのえる



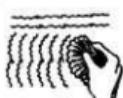
⑤文様をつける



粘土の帯をはりつける

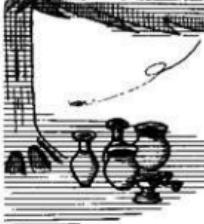


束ねた小枝で線を引く



貝がらを押しつける

⑥日かけで乾かす



よりひもをころがす



⑦野外で焼く

正誤表

■土器の

縄文時
です。世
いている
籠から
の内側に
けてしま
というこ
土器は
い道が限
るのです
でしよう

- ・たま
- ・上の
- ・土器を入れていた食べ物を暖めて食べようとそのまま火にかけたため上器も一緒に焼けた

実際の土器作りは、次の手順で行っていたようです。

P16 下から 3 行目

(誤) 生きていいだよい → (正) 生きていいばよいか

④形をととのえる

〈土器のつくり方〉

①粘土をよくこねる

②のばしてひも状にする

③粘土ひもを積み上げる

④形をととのえる



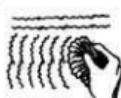
⑤文様をつける



粘土の帯をはりつける

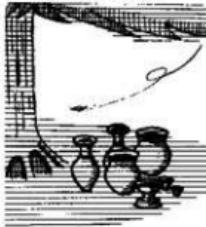


束ねた小枝で線を引く



貝がらを押しつける

⑥日かげで乾かす



⑦野外で焼く





宮内遺跡から出土した須恵器

①・②・⑤は蓋坏(身)、③は蓋坏(蓋)、④は蓋坏、⑥は皿

弥生時代以降、大陸との交流が盛んになるにつれ、米作りの技術をはじめ様々な技術が大陸からもたらされました。土器作りにも、朝鮮半島から新しい技術が伝えられました。古墳時代(約1,700年～1,300年前)中頃以降、この新しい技術で焼かれた土器を須恵器といいます。

写真は、今年度の調査で見つかった須恵器で約1,400年～1,200年ぐらい前のものです。それぞれ皿、蓋坏とよばれているものです。使い方によって様々な種類に分かれ、時代とともに形は変化していきますが、皿やふた、②のような蓋坏など我々が現在使っているものにとても近い感じがします。

須恵器は、写真からも分かりますように、青灰色で、これまでのものに比べ堅くて、たたくと金属音がします。形も整っており薄くなっています。これは、輪轂を用い形を整え、また、焼く時には、野焼きではなく大陸から伝わった登り窯を使い、高温で焼くことができるようになったためです。須恵器は、初め主として貯蔵用、祭祀の際のお供え用として使われていたようですが、後には、一般に食器として広く使われるようになりました。

一方、弥生時代からの伝統的な焼き方で焼かれた物は土師器とよばれています。須恵器に比べると、柔らかく、色も赤っぽい感じのする土器です。今回の発掘では破片しか出土していませんが、日常生活の煮炊き用には土師器が使われていたようです。

■ その他の道具

土器以外の出土品が右の写真です。②は磨石、③は敲石です。いずれも木の実をつぶして粉にしたり、木の根を柔らかくしたりするため、図のようにして使っていただろうと考えられます。

①は石錘、④は土錘です。土と石との違いはありますが、どちらも漁の際おもりとして使用していたと思われます。

⑥は、紡錘車です。図のように糸を紡ぐために糸巻車をさして使ったようです。日本に機織物の技術が伝わってきたのは弥生時代だといわれており、当時は主として麻を使っていました。

装身具には、腕輪・首飾り・耳飾り・垂飾り等がありました。美しく飾るというより、祈り・祭り用や社会的地位の高低を表すものとして使われていたようです。それらの材料としては、石・骨・貝・木・竹・鉄や青銅などの金属・ガラス等が使われていました。

⑤は、そのうちの管玉を作る材料として用いられた緑色凝灰岩です。管玉は、図のような管になった玉をいくつもつなげて

首飾りとして使っていたようです。宮内遺跡の東隣の大原遺跡はそういう玉作りの工房跡として知られていますので、宮内遺跡に住んでいた人々も玉作りの作業に従事していましたかもしれません。

(1) 戸沢充則編「縄文人は生きている」有斐閣(1985年)より

(2) 潮見 浩「図解 技術の考古学」有斐閣(1988年)より



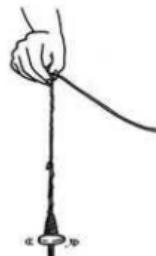
その他の出土品



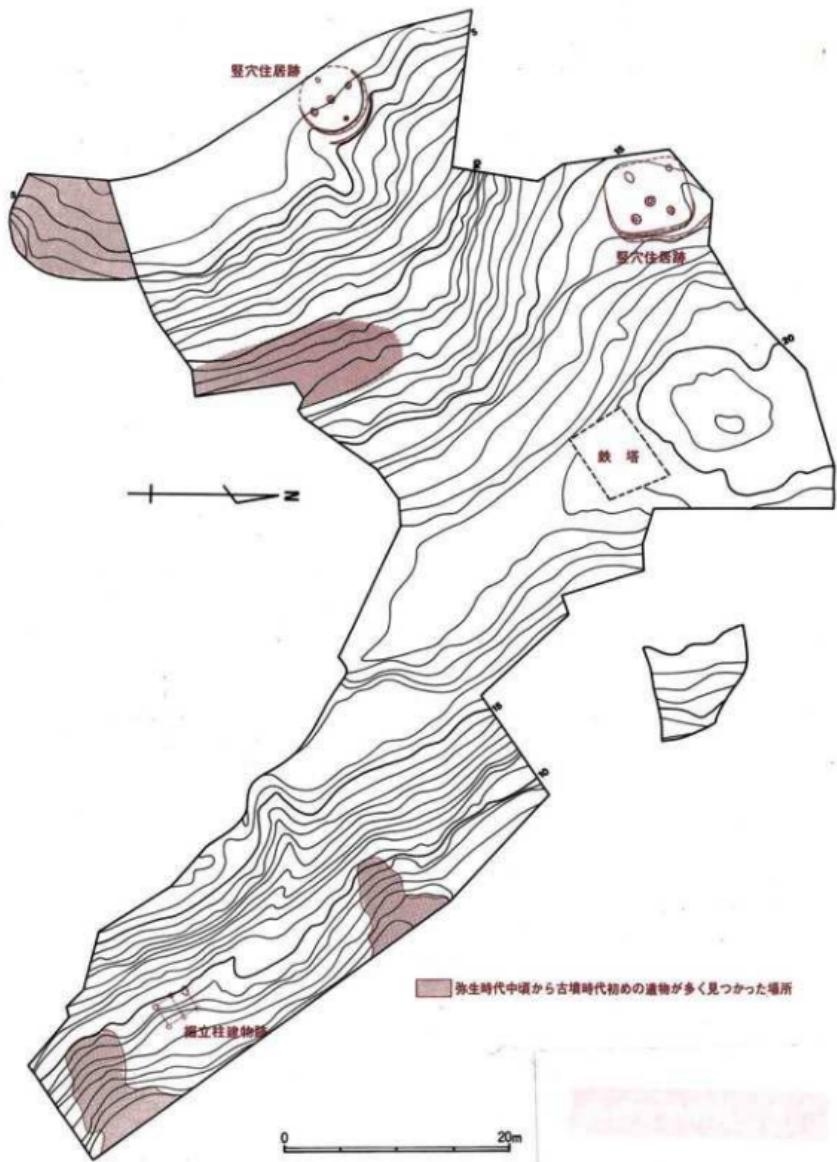
たたき石の使い方 (1)



管玉の使われ方



紡錘車の使い方 (2)



宮内遺跡II区全体図

■ その他の遺跡について

宮内遺跡第Ⅱ調査区以外の遺跡については、今年度はトレント調査を行い、次のようなことがわかりました。

※トレント調査は、遺跡の全部を掘るのではなく、部分的にトレント(長方形の溝)を掘って、遺跡の広さや深さ・時代などを調べるために行う調査です。

宮内遺跡Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区 宮内遺跡は、4つの調査区に分けましたが、Ⅵ区は、Ⅱ区(本調査実施)のすぐ東側にある低い丘です。ここでは西側の斜面から、横穴墓(約1,300年前)と、住居跡を1つずつ発見しました。住居跡は、時期など詳しいことはわかりませんが、どちらもさらにいくつかあると思われます。Ⅰ区は、Ⅱ区西側の水田、Ⅲ区は、Ⅱ区とⅣ区の間の谷の部分で、どちらにも住居跡などの遺構ではなく、土器などが出土しています。

大原遺跡 大原遺跡は、宮内遺跡から東に200mほど離れた丘の上にあります。ここでは、土器の破片がたくさん出土していて、弥生時代の終わりごろのものが一番古いですが、古墳時代の終わりから奈良時代ごろのものが多く見つかっています。また、勾玉や、管玉を作る材料となる緑色凝灰岩・碧玉のかけらも多く見つかっていることから、ここで玉作りが行われていたことがわかります。そして、土器は、土作りをしていた人達が使っていたものだと考えられます。

臼コクリ遺跡 臼コクリ遺跡は、大原遺跡からさらに東側100mほどの山にあります。西側の地区からは、横穴墓を4つ発見しましたが、まだ内部の調査はしていませんので、詳しいことはわかりません。そのほか、南側の斜面から弥生時代の終わり頃の土器が重なりあって出土している場所(土器溜まり)が見つかっており、さらに掘り下げると住居跡が出てくるのではないかと推定されます。また、他の場所からも弥生土器・須恵器が出土しています。

東側の地区では、縦1.5m、横1m、深さ50cmほどの穴が尾根の上にいくつか掘られています。この穴からは遺物がほとんど出土していませんので、詳しいことはわかりませんが、土壙墓(地面を掘り込んだだけのお墓)である可能性が考えられます。また、もっとも東側では小さな古墳が見つかっています。形は円墳または方墳で、直径(-辺)10m程度の大きさです。遺体を埋めた場所(主体部)は残っていませんでしたが、古墳のまわりに掘った溝(周溝)から埴輪の破片が見つかっています。

島田南遺跡 島田南遺跡は、今回の調査地点のなかでもっとも東側にあります。古代の人々が使った土器類や生活した跡は、この遺跡の東の端にありました。東向きのゆるやかな斜面から、住居の柱の跡と見えられる穴が見つかり、石でできた矢じり(石築)や土器が出土しました。またこの近くから土師器・須恵器・ごとく(土製文脚)・埴輪など古墳時代から奈良時代にかけての遺物が出土しています。これらは、現在の梨畑をつくるときに斜面を削った土と一緒に今の場所へ流れてきたものだと考えられます。



安来道路予定地内の各遺跡

- | | | | |
|-------|--------|---------|--------|
| ①宮内遺跡 | ②大原遺跡 | ③臼コクリ遺跡 | ④岩屋口遺跡 |
| ⑤越峰遺跡 | ⑥才の神遺跡 | ⑦谷遺跡 | ⑧島田南遺跡 |

■おわりに

今年度の調査によって発見した遺構や遺物から安来市宮内地区周辺でくらしていた人々の生活の様子を考えてきました。現在のわたしたちの生活は、過去の歴史の上に成り立っていますが、千数百年も前から、わたしたちの祖先はこの地で生きてきたことがわかったのです。

安来道路の建設をきっかけに今回の発掘調査を行ったわけですが、祖先の生活を掘り起こし、先人の歩みを知り、現在に至るまでこの地でどのような歴史的な移り変わりがあったのかを明らかにすることは、わたしたちが生きている現代社会を考える手がかりになると思います。同時に、先人がどんな自然環境の中で生き、自然とどのように関わりをもち、地理的条件をどのように克服して生活を営んできたかを知ることは、わたしたちが、この地で将来どのように生きていけだよいかを考える材料になるのです。

この冊子が、皆さんのが地域をみつめ直し、地域のこれからを考える一つの材料になれば幸いです。

発 行 1990年3月30日

編集・発行 島根県教育委員会
〒690 松江市殿町1番地

印刷・製本 有限会社 谷口印刷